

# 異文化コミュニケーション学、あるいは、文化と自然のポエティクス ——『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』についての一考察——

Intercultural Communication Studies, or the Culture-Nature Poetics:  
A Critical Commentary on *Kigou no Keifu* (Genealogy of Signs and Semiotic Anthropology)

浅井優一  
Yuichi ASAI

**Abstract:** With the aim of further expanding the scope of the theoretical framework introduced by *Kigou no keifu* (*Genealogy of signs and semiotic anthropology*), written by Wataru Koyama, and squarely bringing it into the disciplinary field (*champ*) of “intercultural communication”, this paper tries to carry out the following two tasks. Firstly, it reviews the theoretical perspective of Boasian (linguistic) anthropology, which allows the systematic examination of communications, construed as poetically constituted interactional processes involving both “meaning” (*sens*) and “practice” (*pratique*), on the basis of linguistic and other contextual features empirically observed in the events of communicative practices. It will be noted that this anthropological theory may achieve the systematic yet dialectical integration of the two distinct, dichotomized disciplinary approaches to humans and the environment: i.e. the socio-cultural interpretive (*idiographisch*) and the natural scientific (*nomothetisch*) approach. Then, the paper traces how the Boasian theoretical perspective has developed into the communication theory of semiotic (linguistic) anthropology today, advanced by Michael Silverstein. This semiotic theory is primarily based on the contemporary anthropological notion of “ritual”, in which Erving Goffman’s interactional-sociological insights and Roman Jakobson’s formulation of the “poetic function” are coherently combined. Secondly, this paper explores the applicability of the Boasian-Silversteinian anthropological framework to the field of “intercultural communication studies”, which is composed of the following four divisions: viz., “intercultural communication”, “interpretation and translation studies”, “language communication”,

and “environmental communication”. In this endeavor, the paper underlines the significance of reflexive theorization, which demands that our own research activities be understood as communicative practices which must be reflexively examined by ourselves. Also, it highlights the importance of seeing “nature” as semiotic contexts that are historically constructed in and by sociocultural interactions, i.e., communicative practices. In so doing, this paper tries to help identify the challenges facing intercultural communication studies, and further promote the interdisciplinary program, aiming to integrate the dichotomized “disciplinary” approaches, “culture” and “nature”, and “theory” and “practice”.

## 1. 序

「学問をする」とは何か。ここに論じる書は、そうした問いについての一考をせまる一冊となるかもしれない。とりわけ、オタク的な、動物的な「神々の闘争」が繰り広げられる、「ポスト・モダン」な〈今ここ〉にある異文化コミュニケーションの学徒にとって、本書が一貫して提示する一つの「問い」、「問題系」、すなわち、「ポアス人類学」の系譜に通底する、記号論的〈全体〉への志向、そして、その冷静さの背後に見え隠れする、確固とした批判的精神は、そのような〈今ここ〉を超越せんとする一つの契機、あるいは、異文化コミュニケーション学が歩むべき一つの〈途〉の存在をさし示す「思想」の系譜なのではないか、まずはそのように評しておきたい。

本書、『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』は、シカゴ大学において、北米言語人類学の第一人者であるマイケル・シルヴァスティン氏に師事、現在、立教大学異文化コミュニケーション研究科において教鞭をとり、「言語」を導きの糸として、「文化」と「自然」が織りなす記号論的〈全体〉について思考しつづける小山亘准教授によって執筆され、一部、同研究科において小山氏に師事する、榎本剛士氏、永井那和氏との協働により編まれた「テキスト」である。したがって本書は、言わずと知れた「アメリカ人類学の父」、フランツ・ポアスに端を発し、その弟子エドワード・サピア、ベンジャミン・リー・ウォーフ、さらには、スタンリー・ニューマン、メアリー・ハースらへと展開、チャールズ・パース、ローマン・ヤコブソンの記号論へと接合し、デル・ハイムズ、そして、マイケル・シルヴァスティン、その同僚、弟子たちによって紡がれてきた「ポアス人類学」的思考の歴史を体現する一冊として位置づけられうる。そうであるならば、そして本書が、異文化コミュニケーション学を担ってゆく学徒たちに向けて投げられた「メッセージ」であるとすれば、本書が提示する「ポアス人類学」の思想、その理論的枠組みが、異文化コミュニケーション学のさらなる発展に、いかなる洞察、示唆を与えうるのか、まずは、そのような視座から本書を読み解かねばならないだろう。

## 2. ボアス人類学

「ボアス人類学」とは何か。本書が、繰り返し強調しているとおり（とくに、第1章参照）、ボアス人類学の精髓は、〈文化〉、換言すれば、見たり、触ったり、臭いを嗅いだり、味見をしたり、など、いわば単純に「身体」（五感）的な活動のみには回収されえず、「解釈」を要する「意味」、「概念」、「コスモロジー」などといった「象徴的」次元と、他方、〈自然〉、換言すれば、「友人と話す」、「犬と戯れる」、「自然を感じる」、など、まさに「身体」（感覚）などを使用して行われる「（相互）行為」が生起している「場」、すなわち、ある「現象」が起こっている「もの（物体）」の次元（あるいは、動物行動学的な次元）、この両次元を「言語」の分析に依拠して体系的に接合可能とするところに見い出されよう。言い換えれば、〈意味〉と〈行為〉、あるいは、〈構造〉と〈現象〉といった、それぞれの次元における相対的な特徴の存在を認識したうえで、その両次元の相互嵌入の過程、ありようを、「言語」、すなわち、〈今ここ〉の相互行為には立ちあらわれない象徴的、規則（体系、構造）的次元に属する特徴と、〈今ここ〉の相互行為において使用され、（ダイクシス<sup>1</sup>など）その状況（コンテクスト）に応じて言及対象を変化させ、個々に多様なかたちで表出する可変的次元、この両次元の相対的特徴をあわせもつ「コミュニケーション」現象の経験的な記述・分析にもとづいて考察するという手続きをふむことによって、両次元が有する特質を、どちらか一方の次元に還元して論じることなく、あらゆる変数が錯綜する現実世界の様子、言説空間の布置、したがって〈全体<sup>2</sup>〉を、体系的に理論化する枠組みを有することにある、と略言できよう。

それではじっさいに、そうした理論化がいかにして可能なのだろうか。やや抽象的な論議になることを恐れず、最初に、理論的枠組みと、その展開の様子を、本書（とくに第5章）に依拠して、要約的に通観したい。ボアス、そしてサピアなど、その弟子たちによって体系化される上記の理論においては、人間の「意識」（＝イデオロギー）、「無意識」（とりわけ、言語構造）、そして「実践」（行為・語用）、これら3者の「弁証法的」な絡み合いによって、歴史的変遷、より一般的には「文化変容」のメカニズムが解釈されている。まず、これら3者のうち、前2者（すなわち「意識」、「無意識」）は、「実践」（行為・語用）、つまり、「コミュニケーション出来事」が生起することによって、はじめて存在しうるものであるから、「実践」（行為・語用）に対して「受動的」な立場にあると理解されている。しかしながら、生起しているコミュニケーション出来事の「意識的」な認識には限界があり、その結果として、「実践」（行為・語用）は「歪曲されて」解釈され、そのような「実践」の歪曲された解釈を「モデル」として、さらなる「実践」が行われる。こうした「意識」と「実践」の両者が相互に影響し合う過程を通して、「実践」は変容を被ってゆくことになる。一方、言語構造を含む「無意識」の思考は、そうした「意識」と「実践」の弁証法的変容のプロセスにおいて使用（指標）されるが、「意識」とともに、比較的迅速に変化、先行してゆく「実践」に対しては、つねにやや後景に取り残されるかたちとなる。つまり、言語構造は、現在起こっている「実践」に対してよりも、過去の実践に対して、より「透明」な対応関係をもつことになる。したがって、言語構造を含む「無意識」も、「意識」と同様に、実際に生起している「実践」に対しては不透明な関係しかもちえないということ、言い換えれば、言語構造は、「今ここ」で行われているコミュニケーション出来事（実践）において使用されるのだが、同時に、そのコミュニケーション出来事よりも、それ以前の、「歴史的」に構築されてきた「過去」（「彼岸」）の実践をより透明に反映するものとなる。すなわち、コミュニケーション出来事とは、「彼岸」（過去）に位置している「実践」を「歴史的」な「コンテクスト」として、

「今ここ」において参照（指標）することによって、「今ここ」に生起することが可能となるが、同時に、「今ここ」で行われるコミュニケーション出来事という「実践」は、それが前提とする歴史的なコンテクストに対して「間接的な関係」（「ズレた」対応関係）しかもちえないため、この「ズレ」をもってして、それが生起する基盤としての歴史的コンテクストを「偶発的」に変容させる余地を含んで（非決定性を孕んで）進行し、その結果、さらなるコンテクストを創出してゆく解釈される。

こうしたテーゼは、「音」の領域においても同様の結論を導く。「音声」は、さまざまな「物理的」状況下で産出される音（異音）だが、そうした物理的状況は、つねに変化の過程にあるため、まったくもって同一の音声は「反復」されることは原理的に起こりえない。しかし、「音素」という物理的な音には還元できない象徴的な（無意識的な）音の「範疇」構造を、「音声」へと「投射」することによって、そうした無限の音声は「範疇化」（不透明に歪んで表象）され、それによって、ただの「音」（音声）は、「意味」をもった（つまり、意識的に認識可能な）ものへと変化する。さらに、そうした音の次元において確認される「音声」と「音素」の不一致は、「意味」の次元においても同様な様相を呈する。たとえば、「命令形」といった統語形態の範疇、つまり「命令法」という「文法範疇」は、じっさいに「実践」の場において起こる「命令行為」とは、一対一対応しないという事実である。すなわち、「音声」が無意識の「音素範疇」にもとづいて、歪んで（ズレて）認識されるのと同様に、実践（行為）の「意味」、あるいは「機能」も、無意識の「文法範疇」にもとづいて、歪んで理解されることになる。

このように、ポアス人類学では、規則的、体系的な特徴を示す「無意識」の構造としての「言語」が、音声、感覚、身体、自然が位置し、多様で個々に特有な特徴を示すコミュニケーション「実践（行為）」の場において、「意識的」な解釈行為によって使用され、「実践」を（歪めて）理解させるもの、言い換えれば、「音素」や「文法範疇」といった、「反復」を通して歴史的につくられる、象徴的な「パターン」（＝範疇、類型、規則、形式）、いわば「言語（文化）の型」のようなものを「覆い被せること」（範疇化、合理化すること）によって、認識、理解可能な「経験」、「出来事」が、かたちづくられると解釈している。つまり、無意識としての「言語構造」、意識的な「解釈」、そして意識的な解釈にもとづいてなされる「実践」、これら3者が、〈今ここ〉のコミュニケーションの場において、相互に不透明に、「ズレ」（相克）を孕みつつ絡み合い、影響を及ぼし合い進行することによって、歴史の変遷、すなわち「文化変容」が生じる、という理解に達することになる。

したがって、ポアス人類学の社会文化（コミュニケーション）理論は、「歴史的」構築物としての「言語」を媒介とした「範疇的認識」を要石にして、象徴的、規則的、体系的な、〈文化〉（「意味の構造、体系」）的次元と、他方、音声や身体、感覚など、個別的で、それぞれに独特な現象として生起する〈自然〉（あるいは、「行為、実践、現象」）の次元、この両次元が交差することによって現実世界がつけられていると仮定し、その両次元の相互作用を体系的に理論化できるように立ち上げられている。サピアを引用する本書のことばに置き換えれば、それは、無意識の、歴史的、社会共同体的な象徴的形態（構造的範疇）が、混沌とした現実の談話言説（語用実践）の世界へと投影されることによって、ロマン主義的な狂騒曲のようにダイナミックで混沌とした実践の「流動を、美しく、それ自体において満ち足りた知覚可能な形態・形式に変容させる」（p. 515）として理解されているのである。

### 3. 「詩的機能」(ヤコブソン)、そして「儀礼」(シルヴァスティン)へ

そして、すでに明らかであろうが、このようにポアス、そしてサピアらによって体系化されてゆくポアス人類学の理論的基盤上に、のちにシルヴァスティンは、ヤコブソンによって発見された「詩的機能」との結節点を見出したといえよう。そして、「詩」、あるいは、「儀礼」(=「行為の詩」)を蝶番に、「構造」(あるいは、構造主義人類学的局面)としての文化的意味の体系(範疇)と、他方、「現象」(あるいは、現象学的人類学、さらには、自然、生態人類学なども親和性を有する分野が焦点化する局面<sup>3</sup>)としての身体的、経験的、感覚(五感)的实践・行為・場所(個々の語りなど)が、どのようにして結びつき現実世界がつくられてゆくのかという問いを、〈今ここ〉のコミュニケーション出来事を基点に、「テキスト化」と「コンテキスト化」の弁証法的変遷過程として、記号論的枠組みに依拠して、きわめて厳密に体系化する現在の社会記号論系言語人類学の社会文化理論を構築する一側面を見出すに至った、と回顧できるのではないだろうか。

本書において、明快な説明が施されているとおり、「メッセージ」(テキスト)の生成過程に理論的焦点が据えられたヤコブソンの「6機能モデル」の本質をなす「詩的機能」の特徴は、「反復」にある。詳細については、本書(第2章2節、第5章5節など)、あるいは、平賀(2003)を参照していただきたいが、「詩的機能」によって表出する「反復(構造)」とは、「範疇列軸」(つまり、(ソシュールの)言語理論(ラング・パロール)の根本をなす二つの原理軸の一方)の構成原理である「類似(同一)性」の原理が、「連辞軸」(つまり、「連続性」の原理によって構成されるもう一方の原理軸)上に「投射」される(覆い被さる)こと、換言すれば、「類似性」が連続してあらわれる(つまり「反復」する)ことによって、ディスコース上に「パターン(型、構造、枠・骨組み)」のようなものが浮かび上がることである。言い換えれば、無限の解釈可能性を秘めている、いわば「なまの出来事」、〈もの〉の次元としての「コンテキスト」に、「規則性」が付与されることによって、そのコンテキストを社会文化的に「意味」をもつ、(意識的に)一定程度の解釈が可能となるような「テキスト」として統制するものとして機能する。記号論的に別言すれば、多様で雑多な地上(月下)世界において、いわば天界的規則性(タイプ、モデル)を映し出す「類像(icon)」(トークン、レプリカ)を生成する「類像化作用」であることを意味している、といえよう。

こうした、「反復」原理によってつくられる「詩的構造」は、典型的には「詩(韻文)」において顕著に観察されうるが、シルヴァスティンは、ヤコブソンによる洞察を民族誌的研究へと接合し、ことばの次元における「詩(韻文)」と同様に、相互行為の次元においては、一般に「儀礼」として範疇化されうる相互行為のジャンルにおいて、「詩的構造」が明瞭に観察されることを発見する。たとえば、「儀礼」では、詩(韻文)と同様に、その「始まり」、「終わり」が明瞭に標され、その内部も、強く構造化されているのが特徴である。また、「儀礼」に参加する者は、相互に同一の行為を反復する傾向が強く、さらに、「儀礼」という出来事、それ自体が、同じ形式に則って「繰り返し」行われ、それゆえに(太古の昔から連綿とつづく)「伝統的なもの」として理解されることが多い。つまり「儀礼」は、その明瞭な反復構造を通して、それを取り巻くコンテキストからはっきりとした輪郭をもって浮かび上がるテキスト(あるいは「フィギュア」)となることによって、それを観察する者に対しても、儀礼が行われる共同体「内部」の生活者に対しても、その関心を比較的容易に集めうる相互行為となり、したがって、儀礼参加者たちが生活する地域に広く共有されているといえる象徴性の高い「文化的知識」、あるいは、「コスモロジー」(世界・宇宙観)を、典型的に体(再)現する(映し出す)場(icon)として機能していることが多い<sup>4</sup>。

すなわち「儀礼」とは、象徴的、規則的、体系的、静的、天界的、(範疇列軸上に位置する)潜在態としての〈意味〉を、多様・個別的、偶発的、一回的であり、刻一刻と移ろいゆくじっさいのディスコース(連辞軸)上において、現実態として「映し」出す、一種の「フォーミュラ」、「行為の詩」となるのである。そして、ミクロ社会学者ゴフマンが「相互行為儀礼」として喝破したことに関連するが、このような「詩的構造化」は、「儀礼」に限らず、もちろん、より「日常的」な、「毎日の」相互行為においても「ゆるやかに」観察されることは、周知のとおりだろう。つまり、こうした見解に依拠すれば、「相互行為」(コミュニケーション)とは、本質的に「儀礼的」なもの(反復によって構造化され、それ自体が繰り返し行われる一種の「ハビトゥス(habitus)')として了解することが可能となり、ゆえに、われわれはコミュニケーションへと注意・関心を向け、コミュニケーションに参加することを通じて「社会的関係」を、繰り返し、構築(構造化)している、といえよう。

換言すれば、上のような考察の帰結として、われわれが身をおく現実世界の中心には「コミュニケーション」、したがって「儀礼」(=行為の詩)が存在している、という理解が導かれる。つまり、コミュニケーションという「儀礼」(詩的構造化、類像化作用)を媒介項として、象徴的、規則的、観念的〈意味〉の世界と、指標的、偶発的、経験的〈行為〉の世界が折り重なり、「文化」的次元が「自然」的次元へと「投射」されること、別言すれば、〈今ここ〉で起こる、いわば物理的、身体(感覚)的、「自然」的、「もの」的な「現象」(なまの出来事)が、〈彼岸〉に位置する象徴的、意味的、文化的潜在態としての「構造(体系)」(すなわち「コンテキスト」)をさし示すこと(何らかの「類像関係」を指標すること)——両者の間に「詩的(反復)構造」を構築すること——によって、その「現象」は、文化的に「有意味」な「解釈」可能な「テキスト」へと(「ズレ」を生じさせつつ)変容する、と解釈できるのである。そして、こうした「儀礼」を要石とした「テキスト化」と「コンテキスト化」の過程を通してつくられる「文化」と「自然」の「意味の世界」、それがわれわれの生きる〈今ここ〉の現実世界なのであり、したがって、それは、コミュニケーションが行われるかぎり終わりなくつづく——日々創出され、そして変容してゆく——「文化の過程」である、という理解へと至ることが可能となろう。

#### 4. 異文化コミュニケーション学、あるいは、文化と自然のポエティクス

以上、概観してきたとおり、ポアス人類学は、〈意味〉と〈行為〉、〈構造〉と〈現象〉、〈文化〉と〈自然〉、この両次元が、〈今ここ〉のコミュニケーションを基点として、どのようにして絡み合い「意味の世界」が生成され、そして、それがどのようにして変容していくのか、という社会文化の歴史的変容、その記号論的〈全体〉の変遷過程を、「言語」(範疇的認識)、そして、そこから含意される、「詩的機能」、そして「儀礼(行為の詩)」を基盤に、体系的に考察しうる理論的枠組み——いわば、文化と自然の〈詩学〉——を提示している、と解釈できる。

そして、本書を通読された読者は、こうしたポアス人類学、すなわち、形質(生物)人類学などの自然科学的アプローチ、そして、文化人類学などの解釈学のアプローチ、そして両極を結びつける結節点(あるいは、その両極の特徴を内包した領野)としての言語人類学、という〈全体学〉的理論枠組み、あるいは、その遺産をもっとも十全に体现している現代言語人類学のアプローチと、「異文化理解・通訳翻訳・言語(教育)・環境(教育・運動)」という4本の「糸」から成立し、「超領域的研究」を理念に掲げる「異文化コミュニケーション学」のアプローチとの間に、きわめて強い「類似性」が存在すること、つまり、前者が後者に応用可能であることに気づくだ

ろう。

まず、「異文化コミュニケーション学」における4領域は、①〈理論〉と〈実践〉、すなわち、「自然」を含む「異文化（他者）」の「理解」・「表象」・「通訳翻訳（インタープリテーション）」という、個々の文化社会、自然（環境）がもつ固有な「意味」の世界を「解釈（翻訳）」する、といった〈理論〉的課題と、他方、そうした〈理論〉（解釈）にもとづいて（モデルとして）、それをどのようにじっさいの「実践・行為」へと「効果的」に結びつけるか、といった〈実践〉的課題、さらに、②〈文化〉と〈自然〉、すなわち、（象徴的）「意味」（構造）や、人間の「コミュニケーション」を主に扱う「文化系」のアプローチと、他方、環境問題をはじめとして、「自然・環境」の次元を主に扱う「自然系」のアプローチ、この①と②の二つの変数軸の交点に、便宜上、位置づけられうる。そして、これらの課題、アプローチを、どのようにして体系的に実践してゆくか。ここに、〈理論〉と〈実践〉、〈文化〉と〈自然〉の接合を志向する「異文化コミュニケーション学」の「問い」が存在しているならば、そこにおいて、「意味」と「行為」の「詩的」相互行為の過程として「コミュニケーション」をとらえる、ポアス人類学（そして、現代言語人類学）の方法論の応用可能性は理解されよう。

まず、①の軸について言及したい。たとえば、「自然」を含む「異文化」（他者）を理解、通訳・翻訳（インタープリテーション）することや、言語や自然（環境）についての教育（ないし運動）を実践することは、単純に、ある特定の「文化」や「自然（環境）」の生きられ方、ありようといった、象徴的「意味」を理解・解釈し、それを理論化するのみではなく、同時に、そうした理論化が行われ、それにもとづいて自らの「実践」、「行為」が行われるという、一連の「研究・実践」の過程自体を通して「何がなされているのか」という側面も、その研究の射程に含める必要があるといえる。換言すれば、異文化理解、通訳・翻訳、言語・環境教育といったすべての研究営為・実践、それ自体が、日々行われる「コミュニケーション行為」の一つの様態にすぎないのであれば、そうしたわれわれの「行為」が、どのような歴史、文化、つまりコンテキストを「前提」として行われ、それによって、そのコンテキストはどのように変容、ないし再生産されてゆくのかといった、少なくともこの二つの局面の存在を認識し、その両方を「歴史的」に、よって、「再帰的」（自己言及的）に考察することによって、自らの研究営為自体を相対化しうる枠組みをもつ必要があろう<sup>5</sup>。

つぎに、②の軸において述べれば、われわれの現実世界が、文化と自然の〈ポエティクス〉——コミュニケーションを媒介として「詩的」に創出される、〈意味〉と〈行為〉の弁証法的変容「過程」として存在する〈今ここ〉——であるとするポアス（言語）人類学的解釈に依拠すれば、われわれにとっての「自然」（環境）とは、いうまでもなく、いわゆる〈もの（物体）〉としては存在しえず、当然、われわれが日々従事する、「今ここ」のコミュニケーション出来事を媒介することによって生起可能な——「詩的」につくられることによるのみ解釈可能となる——歴史的な「コンテキスト」として存在しているという解釈へ、その論理的な帰結として至ることが可能となろう。

たとえば、とりわけ70年代以降、国立公園が林立するアメリカ「西部」を中心にして形成されてゆくエドワード・アビーや、ゲーリー・スナイダーらの思想（あるいは、デイヴ・フォアマンの「アース・ファースト！」などに代表されるようなディープ・エコロジーなどの環境思想）、すなわち、「抑圧された他者」（声なき「サバルタン」）として「自然」を解釈し、そのような「自然」に“agency”を付与し、その「ありのままの自然」（＝個物、原初、野生（野蛮）としての自然（他者））を「透明に」表象することを通して、その「声」を代弁し、それによって抑圧（人

間中心主義)からの解放を模索する思考。そして、その「透明な表象」のあり方、あるいは、「他者」(自然)と「自己」(人間)との2項対立が瓦解しうる地点を、「今ここ」の「身体(感覚)」、「場の共在性」などに見い出そうと試みる、「ポスト・コロナリズム」的な環境思想へと至る展開は(cf.野田,2008)、19世紀後半から20世紀前半にかけて、ウィスコンシンなど現在の「中西部」(シカゴの後背地)において開花したジョン・ミューアの「自然保護」、そして、アルド・レオポルドの「土地倫理」、「生命の権利(biotic right)」などといった、いわば「自然」が「所有」する「権利」を主張する類の思想的遺産を基盤とし、さらに、それらの思想が母体とした、19世紀前半から中葉にかけての、ソローやエマソンらの「東海岸」的超越主義思想、すなわち、「原生自然(wilderness)」を人間の精神、生命、活力の源泉としてとらえ、それを通して「神」、「原初」、あるいは「書記された彼岸」(p.356)との象徴的かつ身体的一体化を夢想するロマン主義的思想を母体として形成された、という思想的系譜を辿ることができるのではないだろうか。

じっさいに、こうした思考(意識的解釈)のありようを反映しながら、19世紀以降のアメリカの「自然」(環境史)は、(実践を通して)形成されていったと解釈しうる。浅井(2008)において論じたとおり、現在のアメリカ中西部最大の「都市」シカゴは、19世紀中葉以降、鉄道が走り「都市化」が進行する「東海岸」との対比から、「都市」の生活に疲弊した人間が、活力の源とすべき「自然」(野生)として「(中)西部」を位置づけるソローやエマソンらの超越主義思想と、他方、そうした「東海岸」には存在しない「豊かな自然」を開発(開拓)すべき資源としてとらえる思想、この両方が表裏をなす「東海岸」のまなざしを体現するかたちで、ニューヨーク、そしてボストンなどからの資本を吸収し、急速な発展を遂げてゆく。事実、そのように、東海岸の資本を吸収し、「東」と「西」の鉄道網、水運の結節点として「自然のなかに聳え立つメトロポリス」となるシカゴが形成されてゆく一方で、「都市」としてのシカゴに資源を提供する場所として機能したシカゴの「後背地」(ウィスコンシン、アイオワなど)において、ミューアの「自然保護」、それに影響を受けて形成されるレオポルドの「土地倫理」などといった、東海岸的超越主義を母体に展開した思想が花開く。そして、このような中西部的思想を体現するように、そのさらなる「彼岸」(自然、野生、原初)、つまり、「西部」の地において、(アメリカ先住民の「駆逐」の末に)創造(想像)される「自然」——すなわち、「西部」(今ここ)において夢想されるさらなる「西部」(彼岸)——が「国立公園」であり、そのような「西部」を〈今ここ〉にして新たに転回してゆく思想が、20世紀中葉以降の(とりわけ、70年代以降に繁栄をみる)環境思想、つまり、「大きな自然(他者)」から「小さな自然(他者)」、断片的で、個々に独特な、多様な、目の前にある身近な〈今ここ〉の「自然」への志向であったといえるのではないか<sup>6</sup>。

このように、19世紀以降のアメリカにおける「環境史」は、〈東海岸〉と〈(中)西部〉、〈都市〉と〈田舎(後背地)〉、〈今ここ〉と〈彼岸〉、〈文化〉と〈自然〉といった2項対立(「対照ペア」)的構図(「対照ペア」については、本書、pp.274-278を参照)、すなわち「詩的構造」(範疇的認識)を描きつつ展開したアメリカの環境思想の軌跡であり、それを通して「歴史的」につくられていった the East—Chicago—the rest of the (Mid) West という社会文化的な地理空間として存在していると解釈しえよう。そのようにして「コンテクスト化された環境」は、本誌第5号掲載のSilverstein(2007)において分析された、シカゴ大学生の会話において観察されたように、(いわば環境とは無関係な)「日常」コミュニケーション行為において「喚起」され、それが、シカゴ大学生の相互行為における社会的関係、アイデンティティを構築する歴史的背景を提供していた。つまり、われわれにとっての「自然(環境)」とは、解釈と実践の弁証法的変遷の背後に、陰画として浮かび上がり、コミュニケーション(すなわち、「儀礼」)において指標さ



れることによってはじめて存在しうる、環境史（詩）的「コンテクスト」としてのみ存在しうるものとして解釈しえよう。そうであるならば、当然、「環境」を無視したコミュニケーションの探求、あるいは、「コミュニケーション」を度外視した環境研究は、いずれも不十分であることが明快に理解されうらうだろう。そうではなく、「コミュニケーション」という出来事を媒介として、「人間」が、そして、それを取り巻く「環境」、あるいはコンテクストは、いかにして結びつき、そして変容していくのか、そうした問いをそこから投げかけるような視座に立つことによってこそ、「人間中心主義」の「再考」をうながしうる地平を模索することが、はじめて可能となるのではないだろうか。

## 5. 結び

それぞれの視座から、多様な読み、個々に独特な解釈を生起させ、さまざまな仕方で「コンテクスト」化されてゆくであろう『記号の系譜』というテキストを、本稿では、「異文化コミュニケーション学」の視点において紐解いてみた。そして、ポアス人類学と、ヤコブソン（そして、パース）記号論の交点において展開した現代言語人類学の社会文化理論を、「詩」、そして「儀礼」を要石とした、文化と自然の〈ポエティクス〉として解釈し、そこにおいて、「異文化理解」・「通訳・翻訳」・「言語（教育）」・「環境（教育・運動）」の4領域がもつ個別性、専門性、相対性を無にすることなく、それらが複雑に交差する現実、〈全体〉の理解をめざす「異文化コミュニケーション学」の可能性を見出すことを旨とした。

以上の試みから導かれうる一つの帰結は、「専門性を有する、互いに分離したおのおのの学問領域を、いかにして接合できるのか」と企てるのではなく、むしろ、「専門性を有するおのおのの学問領域自体が、同様の歴史、文化社会（コンテクスト）のなかで生起する〈コミュニケーション〉を通してつくられてゆくものならば、それらは、本来、すでにつながっているものであり、そのつながりの仕方、ありようを、さまざまな視座、理論にもとづいて探求する」、そうした問いを発することなのかもしれない。そして、そのような問いに対する一つの応えが、さまざまな問題系が絡み合った、いわば「超領域的」な現実世界、すなわち「今ここ」の個々の語りから、それを取り巻く「書記された彼岸」へと拡がる、意味の地平の全体を、「言語」をモデルとして、「歴史的」に、「再帰的」に、そして「経験的」な観察・分析に立脚して精緻に理論化する枠組み、ポアスが、遥か100年以上前に構想していた人類学的、したがって、記号論的な〈全体学〉の系譜、その延長線上において存在していることを、本書は示しているのではないだろうか。

アドルノは、「学問をする」とは、「瓶に伝言を詰めて海に投げる」ようなもの、と語ったという。この思想の系譜が、いつか移ろいゆく遠い彼岸を、今ここで待ちわびつつ、『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』についての一考察を終える。

## 註

- 1 ダイクシスは、「わたし」、「あなた」などの一人称、二人称名詞、「こ・そ・あ・ど」などの指示代名詞や時制などを含んでおり、発話が行われているコンテクストそのものをさし示す機能をもっている。換言すれば、コンテクストを、発話が行われている場（今ここ）に基盤づける機能を果たしており、「状況依存性」が相対的に高い言語要素である。たとえば、一人称名詞「わたし」がさし

- 示す対象は、発話状況がわからなければ同定できない反面、「美」、「真理」などの抽象名詞がさし示す対象は、発話状況にかかわらず、同定可能性は顕著には変化しない。
- 2 したがって、本書の序において述べられているとおり (pp. 11-13)、ここでいう〈全体〉とは、〈今ここ〉で表出するさまざまな現象が示す独自性、個別性、すなわち多様性を抹消し、よって、本質主義的、存在論的な全体性を希求する営為を、まったくもって意味しておらず、あえていえば、そうした本質主義的思考(イデオロギー化)自体が、どのように生起するのかを考察しうるメタ理論のこと、であるといえる。つまり、個々に独特、多様な〈今ここ〉のコミュニケーション「出来事・現象」(現実世界)の経験的(民族誌的)な記述・分析から出発し、それら個々別々の〈今ここ〉の現象のみには還元できない(よって、それらが潜在的に前提とせざるをえない)象徴的、規則的、統計(集団)的な現象(つまり「構造」的次元)の存在を陰画的に導き出すことによって、「現象」と「構造」の両次元の相互関連の仕方、その「過程」を精緻に記述することが可能な理論的枠組み、そうした意味としての〈全体〉として解されるべきだろう。
  - 3 現在の(日本の)文化人類学的営為(とりわけ「インタラクション学派」)に対して、その「指標の矢」が放たれている本書第1章にあるとおり、メルロ＝ポンティ的、身体、感覚、経験的「生活世界」——〈今ここ〉——へと「象徴」的次元を還元するような現象学的人類学の営為は、文化生態学、新進化論などの、生態・自然人類学と親和性を示す (pp. 109-120)。
  - 4 Silverstein (2004, p. 628) は、インドネシアの Roti において、村の政治的リーダーの死にともなって行われた、新たなリーダーを任命するための継承儀礼における発話(テキスト)の「構造」を図式化している。簡略的に述べれば、まず、儀礼の最初のセグメントでは、〈山羊〉と〈おんどり〉がもつ、立派な〈髭〉と〈尾羽〉について語られる。つぎのセグメントでは、山羊の髭、おんどりの尾羽が〈抜かれ〉、再びそれらが立派に〈生えてくる〉ことについて語られる。最後のセグメントでは、「山羊」と「おんどり」が、以前と同じ「完全な状態」再び戻ることが語られる。つまり、この儀礼では、〈山羊〉(おんどり)、〈髭(前)〉(尾羽(後ろ))、〈抜かれること〉(生えてくること)などが、それぞれ「ベア」を成しており、さらにそれらが〈完全な状態〉から〈不完全な状態〉再び〈完全な状態〉に戻るといふ、全体として明瞭な詩的構造を成していることが観察される。そして、同様の儀礼が、村の政治的リーダーの死にともなって「繰り返し」行われ、よって、それは、「リーダーの死、村の危機も、新たなリーダーによって補われる」、「若き未熟なリーダーも、いずれは、立派に成熟する」、などといった共同体の成員に広く共有される象徴的な「文化的知識」を、〈今ここ〉で「喚起」する場(行為)、通過儀礼となっている。
  - 5 自らが属する言説空間、自らが行うコミュニケーション「行為・実践」そのものを考察対象としない、したがって、相対的視座を著しく欠くように思われる研究営為、場あたりの繰り返り広げられる社会運動(ネオリベラルな言説に依拠した環境保護・開発運動など)が、「サステイナブルな社会」を構築してゆくことが、はたして可能だろうか。
  - 6 こうした環境思想の軌跡は、〈象徴〉から〈指標〉、〈観念〉から〈経験〉、〈彼岸〉から〈今ここ〉へという記号論的座標の内部におけるイデオロギー的転回として、「再帰的」に自覚することが可能であり、そのいわば終着点として、〈もの〉のリアルへと至ろうとするもの、として分析しうる。つまり、そのような思考は、いずれの極に重きをおこうが、結果的に、歴史とは無関係に存在する「自然」なるプロセスを実体視しており、そうした実体化の末に見出される「存在」、「始原」、「本来性」といったものへの回帰を「夢想」するハイデガー的存在論を前提とせざるをえず、したがって、具体的な歴史や社会、記号論的現実世界を等閑視する、まさしく「全体(還元)論」的志向を召喚する可能性をもつ。その結果、そうした思考は、〈今ここ〉と〈彼岸〉という記号論的枠組み、あるいは、近代的な〈文化〉と〈自然〉の2項対立的図式を越え出て行くものではなく、むしろ、そのような2項対立の枠組みを再生産しつつける思想的装置として機能しつづけてしまうと考えられる。こうした2項対立の発想そのものの瓦解、両者の「宥和」を遂行するのであれば、本書の序 (pp. 9-12) が示唆しているように、むしろ、その両者——自然のプロセスと、具体的な「歴史」の過程——を切り離すことなく、両者の結びつきの様子、「テキスト化」の過程そのものを、歴史的(=環境史的、コンテクスト史的)に考察することによって、それらのもつれ合いとして「構築される」記号論的言説空間の布置、それ自体を再帰的に記述しうる記号論的枠組みが必要なのではないだろうか (cf. ミュラー＝ドーム, 2007, pp. 171-174)。

参考文献

- 浅井優一 (2008). 「文化と自然の『環境コミュニケーション』:〈今ここ〉〈彼岸〉の詩的構造としてのシカゴ環境史」『異文化コミュニケーション論集』第6号, 69-85頁.
- 平賀正子 (2003). 「詩的言語」山梨正明・有馬道子 (編著)『現代言語学の潮流』(128-140頁). 勁草書房.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社.
- ミュラー＝ドーム, S. (2007). 『アドルノ伝』(徳永恂・柴寄雅子・春山清純・辰巳伸知・長澤麻子・宮本真也・北岡幸代・訳). 作品社. [原著: Muller-Doom, S. (2003). *Adorno: Eine biographie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag].
- 野田研一 (2008). 「世界は残る。……失われるのはぼくらのほうだ: 〈いま / ここ〉の詩学へ」『水声通信』第4巻, 第3号, 42-50頁.
- Silverstein, M. (2004). "Cultural" concepts and the language-culture nexus. *Current Anthropology*, 45, 621-652.
- Silverstein, M. (2007). How knowledge begets communication begets knowledge. 『異文化コミュニケーション論集』第5号, 31-60頁.